

2025 年の春分は 3 月 20 日です。

太陽が真東からのぼり、真西に沈む日。昼夜の長さが同じになります。

春の彼岸のちょうど真ん中にあたる日を春分といい、

春分と前後 3 日間を含めた 7 日間を「春のお彼岸」とし、

ご先祖さまを供養したり、お墓参りをする日としても知られています。

仏教においてあの世とこの世がもっとも近づく時期とされています。

ご先祖様と過ごし感謝する期間の行事という点では共通していますが、

お盆は夏、お彼岸は春秋という時期の違いに加え、お盆は帰ってくる

ご先祖様の霊を迎え入れる、

お彼岸はこちらから近くまで行ってお招きするという違いもあります。



「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉があるように、

寒さは和らぎ過ごしやすい季節になります。

桜の開花情報が聞かれるのもこの頃からです。

春分の日とは、昭和 23 年の祝日法の制定当初から

設けられている国民の祝日です。

「自然をたたえ、生物をいつくしむ」ことを目的とした日です。



なぜ春分の日が祝日となっているのでしょうか。

これは、古くから春分の日には皇室行事「春季皇霊祭（しゅんきこうりょうさい）」という
宮中祭祀が執りおこなわれてきたことに由来します。

春季皇霊祭とは春分の日に宮中の皇霊殿で行われる歴代の天皇・皇后・皇親の霊を祭る儀式で、
宮中祭祀のひとつ。先祖を祀るお祭りのことです。

戦前の日本では非常に重要な儀式の一つとされてきたため、国民の祝日となりました。

『山里は 万歳遅し 梅の花』 松尾芭蕉

（やまざとは まんざいおそし うめのはな）

意味：「辺鄙（へんぴ）な山里では、正月も半ば過ぎ梅の花が
咲く頃になって、ようやく万歳がやってきたことだ」

この句は、松尾芭蕉が元禄 4 年（1691 年）の正月すぎ、
故郷の伊賀上野で過ごした際に詠んだ句です。

「おくのほそ道」の旅から戻った、晩年の時期にあたります。

自らの老いと死を覚悟しながら挑んだ過酷な旅を終え、

久しぶりに訪れた故郷ののどかな風情に、芭蕉の心やすらぐ姿が目に見えます。

この句に用いられている「万歳」とは、正月を迎えた民家で「千年も万年も栄えるように」
と新年を祝う民俗芸能です。



2025 年の啓蟄（けいちつ）は3月5日です。

啓蟄の「啓」は「ひらく」、「蟄」は「土中で冬ごもりしている虫」を意味します。大地が暖まり冬眠していた虫が、春の訪れを感じ、穴から出てくる頃です。啓蟄の風物詩のひとつとして「菰（こも）はずし」というものがあります。これは冬の間に、害虫から松の木を守るために付けられた菰を、温かくなる春を前に外すという行事です。菰とは藁（わら）で作るむしろのこと。虫が動き出す啓蟄の時期に外すことで、なかに入っている害虫を駆除する目的があります

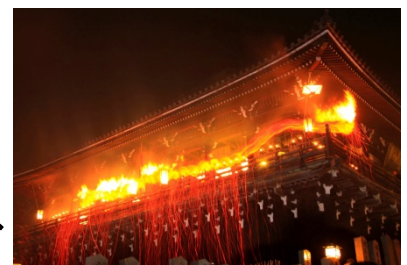


啓蟄の時季に鳴る雷のことを「虫出しの雷」と呼ぶことも。これは春の雷である「春雷（しゅんらい）」の音に驚いた虫たちが、冬眠中の土・穴のなかから飛び出してくる様子を表現したものとされます。俳句でも雷を表現する春の季語として、たびたび用いられる言葉です。春雷は夏の夕立とは異なりすぐに鳴りやむことが多く、生き物たちにとって春を告げる合図となっているかもしれません。啓蟄の時期に旬を迎える花として代表的なものが「桃」です。ちょうどこの時期に、桃のつぼみが開き花が咲きはじめるのが特徴。鮮やかなピンク色を見ると、春の訪れを感じさせます。



修二会（しゅにえ）

奈良市の東大寺の二月堂で毎年3月1日から14日まで行われる法会です。3月12日深夜（13日の深夜1時半頃）には、「お水取り」といって、若狭井（わかさい）という井戸から観音さまにお供えする「お香水（おこうずい）」を汲み上げる儀式が行われます。この行を勤めるの練行衆（れんぎょうしゅう）と呼ばれるの11人の僧侶の道明かりとして、夜毎、大きな松明（たいまつ）に火がともされます。「お松明の火の粉を浴びて一年の健康や繁栄を祈願する」と、縁起の良いものとされ、その燃えかすをお守りとして持ち帰る人も多くおられます。3月12日の籠松明（かごたいまつ）は長さ8m、重さ約70kgで、お松明のなかで最も大きなものです。



『犬耳を 立て土を嗅ぐ 啓蟄に』 高浜虚子

犬が耳を立てて土を嗅いでいる啓蟄の日の散歩道だ。
「土の中から虫が出てくる日」ということで、犬が虫を探して嗅ぎ回っています。
1年を通して見られる行動ですが、啓蟄の日ということにより感慨深く感じている句です。

2025年の雨水（うすい）は2月18日です。

立春が過ぎ本格的な春を迎える予備期間ともいえる頃で、降る雪は雨に変わり、積もった雪や張った氷は解け、水になっていきます。

実際にはまだ雪深い地域もありますが、厳しい寒さが和らぎ暖かな雨が降ることで、雪解けが始まる頃です。

雨水になると雪解け水で土が潤い始めるため、農耕の準備を始める目安とされました。

「春の霞（かすみ）」微細な水滴が空中に浮遊するため、遠方などがぼんやり見える現象。

その際に見えるうっすらした雲のようなものを「霞」といいます。

現象としては霧（きり）と同じですが、春に発生するものを「霞」、

秋に発生するものを「霧」と呼び、区別することがあるそうです。

～春なれや名もなき山の薄霞（うすがすみ）～ 松尾芭蕉

山の麓や湖にかかる霞は、時に幻想的でもあります。

名もない山に、薄くたなびいている霞を見て、春を感じている様子がうかがえます。

「沈丁花（じんちょうげ）」は2月から3月にかけて咲き出す花で、夏の梔子（くちなし）、秋の金木犀（きんもくせい）と並んで三大香木といわれます。

枝の先にはいくつもの小さな花が手まりのようにかわいらしく集まってつきます。

花の色は白や黄色、ピンクなどがありますが、特によく見かけるのがつぼみは濃い紅色で、花びらは淡いピンク色が混ざり合った色です。

沈丁花という名前は、花の香りが「沈香」に似ていることと、十字型の花の形が香辛料の丁子（クローブ）に似ていることからつけられました。



『福寿草』は新年を祝う正月の花としてよく知られ、昔から栽培されてきました。まだ寒さが残る時期に山吹色の花をつける福寿草は、春を告げる花として親しまれてきました。

2月まだ雪が残っている地面から芽を出し黄色い花を咲かせる。

たくましい花です。

つぼみから太陽に向かって花びらを開き、太陽を追って花は首を傾ける。

夜になると花びらは閉じ、翌朝の太陽で開花する。

花びらの中央に指を差し込むとほんのり暖かい、

集光器の役割を果たしています。

福寿草（フクジュソウ）は、新春を祝う花として昔から縁起の良い花として親しまれています。

名前の由来は、早春に花が咲くことから「春を告げる花」として江戸時代に

「福告ぐ草（フクツグソウ）」と呼ばれるようになり、その後、「寿」に差し替わり、

「福寿草（フクジュソウ）」となったようです。



そのほか元日草（ガンジツソウ）、元旦草（ガンタンソウ）、朔日草（ツイタチソウ）、賀正蘭などたくさんのお正月にまつわる別名があるのは、福寿草（フクジュソウ）が旧正月にあたる2月に花を咲かせるのが由来とされます。お正月の縁起ものとしてよく使われる赤い実をつける南天（ナンテン）と組み合わせて飾られることが多いのは、南天（ナンテン）を「難を転じる」とし、「難を転じて福となす」という意味合いで組み合わせられています。

『なずな』は春の七草の一つですが、日当たりの良い道端でお目にかかる”ペンペン草”と言ったほうがピンとくる方も多いかもしれません。

麦の栽培とともに渡来し日本に根付いたと言われる史前帰化植物です。

夏になると枯れる ⇒ 夏無（なつな）

撫でたいほど可愛い花 ⇒ 撫菜（なでな）

など、名前の由来には諸説あります。

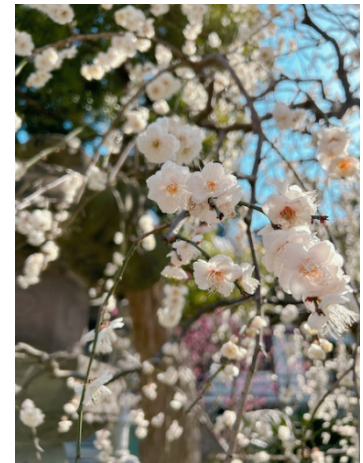
お馴染みの”ペンペン草”は風に揺れたときに鳴る音から付いたもの。

この他に、果実が三味線の撥（ばち）に似ていることから”三味線草”とも呼ばれます。

春の七草の代表とされるナズナは、寒さの中でもロゼット（バラ型）と呼ばれる葉を放射状に地上に並べ、花茎を伸ばして花をつける準備をしています。やがて立春が過ぎ、三寒四温の頃になるとごく小さな白い花を密集して咲かせ、春の訪れを告げてくれます。



『梅』は桜と並んで古くから日本人に愛される花で、奈良時代は「お花見」といえば梅を鑑賞していたそうです。桜と並んで古くから日本人に親しまれている梅。雨水のころに優しい香りの可愛らしい花が見頃を迎えます。



＜梅の名所＞

偕楽園（茨城県）

曾我梅林（神奈川県）

兼六園（石川県）

いなべ市梅林公園（三重県）

北野天満宮（京都府）

太宰府天満宮（福岡県） など

この時期から春にかけて降る雨は「養花雨（ようかう）」や「催花雨（さいかう）」と呼ばれ、梅や桜など春の花の開花をうながすと言われています。

こうした土や水が動き始める雨水は、昔から農業の準備を始める目安とされてきました。

春一番が吹くのもこの頃ですが、気候が不安定なので突然大雪が降ることも。

2025 年の立春は 2 月 3 日（月）です。

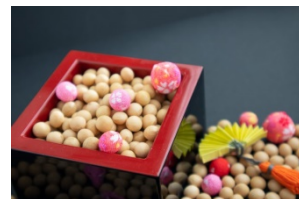
節分は 2 月 2 日となります！

『恵方巻き』節分の日はその年の恵方（縁起の良い方角、2025 年は西南西）を向いて食べる太巻き寿司です。福を巻き込むという意味を込めた巻き寿司のため、七福神にあやかり 7 種類の具が入った太巻きが望ましいとされています。

巻き寿司を鬼の金棒に見立て、それを退治する意味もあるとか。福やご縁を巻き込み、1 年の幸せや願いが叶うよう食べるため、縁が切れたり、福が途切れたりしないよう、包丁で切らず丸ごと食べると良いとされています。



『節分』と言えば、豆まきをして鬼を払う風習が知られています。ではなぜ、立春の前日である節分に鬼を払うのでしょうか？それは、二十四節気の順番において立春が 1 番目だからです。二十四節気で 1 番目ということは、1 年の始まりにあたる日が立春ということになります。したがって、その前日である節分は大晦日と同じような意味合いを持っています。古くから、立春は正月と同様に 1 年の始まりの日として考えられてきました。そのため、「新しい年が来る前に、厄を払っておこう」という想いを込めて、大晦日にあたる節分の日には豆まきをするようになったといわれています。



『初午（はつうま）』は毎年新暦の 2 月の最初の午の日で、稲荷信仰に基づく行事が行われます。

2025 年の初午は 2 月 6 日（木）です。

初午の行事は、京都の伏見稲荷をはじめ、大阪の玉造稲荷、愛知県の豊川稲荷など、各地の稲荷神社で盛大に祭がとり行われ、五穀豊穡や商売繁盛を祈願します。また、いなり寿司などの伝統料理を食べる地域もあります。

稲荷神社とは稲荷をまつた神社で、京都市伏見区の伏見稲荷大社を総本社とします。その昔、2 月の最初の午の日に、穀物の神様が稲荷山（伊奈利山）に降り立ったとか。この故事から、「お稲荷さん」の名でおなじみの稲荷神社で祭事が行われるようになったとされています。旧暦 2 月の初午の日は今の 3 月にあたり、ちょうど田んぼや畑の準備を始める時期だったため、豊作を願って稲荷神社に参拝する習慣ができたという見解も。ちなみに、稲荷の名は稲作の「稻生り」から来たともいわれています。



『門々の 下駄の泥より 春立ぬ』 小林一茶

意味：それぞれの家の門を下駄の泥が汚している。春が来たようだ。雪解けや雨で土がぬかるんでくると、春が来たという実感がわきます。通りすぎる家の門がみな下駄についた泥で汚れていることで、立春の日であることに気がついたかのような句です。

2025 年の大寒は 1 月 20 日（月）です。

1 月 20 日（月）から始まり、2 月 2 日（日）の節分までの約 2 週間が「大寒期」とされ、一年で最も寒いとされる期間です。

大寒は、寒中見舞いでおなじみの「寒中」にあたります。

寒中に出すのが「寒中見舞い」で、立春を過ぎると「余寒見舞い」となります。

大寒の期間には、「寒稽古(かんげいこ)」「寒修行(かんしゅぎょう)」を行うところがあります。

寒さの厳しい寒の時期にあえて鍛錬することで、身体や精神を鍛えるものです。

なかには、海や川などに入って行ったり、「寒中水泳」をしたりする人もいます。

季節的に『三寒四温』が訪れ始めます。

三寒四温とは、三日寒い日が続くと、四日温かい日があるという意味。

その為、ずっと寒かった小寒よりは、温かい日が訪れたりすることがあります。

「小寒の氷、大寒に解く」という言葉があります。

これは最も寒さ厳しい大寒が、小寒よりも温かいことを意味し

「物事が必ずしも順序通りににはいかない」という意味で使われます。

大寒の行事『寒仕込み』

寒の内に汲み上げた水を「寒の水」といい、雑菌が少なく良い水とされています。

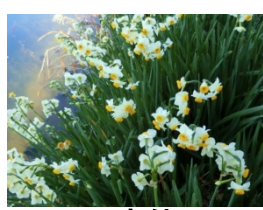
日本酒やお味噌などは、「寒の水」を使って仕込まれ、低温の中でゆっくりと発酵されてうまみを引き出します。

最高の日本酒を作るのに欠かせないのが、「寒の水」と言われるほどで、酒蔵では「寒仕込み(寒造り)」の伝統が昔から受け継がれています。

大寒の頃に咲く花といえば、蠟梅（ろうばい）、水仙、梅、山茶花（さざんか）が有名です。この四種類は、寒い季節に雪の中でもめげる事なく花を咲かせるので『寒中の四花』とも呼ばれています。これらの花を見ると、もう春が近いと心がときめきます。



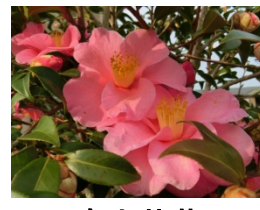
蠟梅



水仙



蕾が膨らみ始めた白梅



春山茶花

大寒の堆肥よく寝てゐることよ 松井松花

「大寒」は一年中で、最も寒い日と言われる。厳しい寒さを、大寒の季語に託して心の寒さに転化している句が多いが、掲句は心の暖かさにつなげている。

「堆肥（たいひ）」は、わら、落葉、塵芥、草などを積み、自然発酵させて作る肥料のこと。寒さのなかで、じわりじわりとみずからの熱の力で発酵している様子は、まさに「よく寝ていることよ」の措辞がふさわしく、作者の微笑が伝わってきます。暖かい春へ向けて季節が動きはじめる頃という意味でしょう。

2025 年の小寒は 1 月 5 日（日）です。

「小寒」の日は、俗に「寒の入り」と呼ばれ、この日から「寒明け（節分）」までの約 30 日間を「寒の内（うち）」と言います。「寒の内」は一年中でもっとも寒さの厳しい季節です。

＜「七草粥（ななくさがゆ）」をいただく＞

七草粥は、1 月 7 日（人日の節句）に春の七草を入れて食べるお粥のことです。

七草は早春にいち早く芽吹くことから、邪気を払うといわれました。

そのため、これを食べることで、1 年の無病息災を祈るようになったとされています。

おせち料理が続き、正月疲れが出はじめた胃腸をいたわり、回復させるにはちょうどよい食べ物で、青菜の不足しがちな冬場の栄養補給も行なうという目的もあったようです。

「春の七草」の名前：五七五七七の短歌のリズムで覚える方法が有名です。

「セリ ナズナ／ゴギョウ ハコベラ／ホトケノザ／スズナ スズシロ／これぞ ななくさ」

＜1 月 7 日の人日の節句に七草がゆを食べるルーツ＞

1 月 7 日は人を占う日として「人日（じんじつ）」といい、「七種菜羹（ななしゅさいのかん）」という 7 種類の野菜をいれた熱いとろみのある汁物を食べて無病息災や立身出世を祈った中国文化と雪の間から目を出した草を摘む「若菜摘み」という日本の宮中行事が合わさって、七草がゆを食べる風習がうまれたとされています。

＜鏡開き＞

1 月 11 日は、「鏡開き」です。年神様にお供えした鏡餅（かがみもち）を下げ、雑煮や汁粉などに入れて食べます。

神聖な鏡餅は、刃物を使わず、木槌（きづち）などでたたき割るのがならわしでした。

＜「寒九（かんく）」の水と雨の力＞

寒に入ってから、9 日目を「寒九」といいます。

「寒九の水」は寒九に汲む水のこと、薬を飲むのによいとされています。

さらには、餅をつくにも、お酒を造るにも、とりわけ向いていると考えられてきました。

寒九に降る雨は「寒九の雨」と呼ばれ、豊年の兆しであるといわれます。

＜七福神巡りへ出かけるのも一興です＞

七福神とは、大黒天（だいこくてん）、毘沙門天（びしゃもんてん）、恵比寿（えびす）、寿老人（じゅろうじん）、福祿寿（ふくろくじゅ）、弁財天（べんざいてん）、布袋（ぼてい）の七人の福の神の総称。

江戸時代には、元旦から 7 日までに七福神を巡ることが招福の行事として流行したそうです。

『正月の 子供になりて みたきかな』 小林一茶

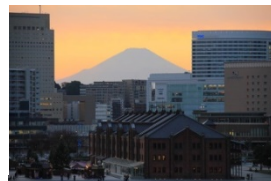
句意：お正月が来ると、子どもたちはお年玉をもらい、凧揚げや駒回しをして遊んでいます。
そんな無邪気な子供になってみたいものですよ。

2024 年の「冬至」は 12 月 21 日(土)で、一年の中で最も昼の時間が短い日です。

暦の上では冬の真ん中ですが、本格的な冬の寒さや厳しさは、この冬至のころから始まります。

1. 昼の時間の長さが最も短いこの冬至の日が、日の入り時刻も一番早い日というわけではありません。
一年で最も日の入りが早いのは冬至よりも少し前の
12月6日で時刻は午後4時28分32秒でした。
2. 日の出が最も遅くなるのは冬至が過ぎた後のお正月の頃で
1月7日の午前6時50分59秒になります。

横浜の夕焼け



横浜港の夜明け



冬至は別名「一陽来復」という言葉で表現されますが、意味は「陰が極まって陽にかえること」
良くないことが続いたあとに好転すること。冬至の日を境に運が上向いていくことを表しています。
そんな重要なターニングポイントである冬至には、いくつかの「やってはいけない」とされることがあります。よく知ると、ただ縁起がいいわるいということだけでなく、寒さの厳しいこの時期を快適に過ごすための理にかなった言い伝えとも感じるものばかり。

<大掃除のタイミング>

良い運気に切り替わる大事な冬至に大掃除をして幸運を掃き出してしまうのはNG。

大掃除は冬至の前に済ませ新春の準備を整えておくことがベストです。

また、大掃除には体力も気力も必要なことから、陰の影響が大きく静かに過ごすべき冬至にはやってはいけないとされています。

<新しいことを始めるのは、陰陽の切り替わる冬至以降>

古代中国の陰陽思想において陰の気がもっとも強いとされる冬至は何かを始めるには向いていない日と考えられています。アクティブに行動を起こすのではなく長い夜の時間生かしてしっかり1年を振り返るのがおすすめの過ごし方。考えやアイデアを蓄え計画を立てるまでにとどめておきましょう。

<ゆず湯に入る>

冬至といえばゆず湯、と言ってもいいほど一般的な冬至のイメージがあるのがゆず湯。

なぜ冬至にゆず湯に入るとよいとされているのか、その理由には諸説あるようです。

冬至＝湯治、柚子＝融通が利く、といった語呂合わせから定着したというほか、体を清める禊ぎの風習、ゆずの香りによる邪気払い、また、長い年月のかかるゆずの成長になぞらえて「長年の苦労が実る」という願いが込められているという説もあります。

<来年の計画を立てる>

冬至の日を境にまた日が長くなり始める再生の日、新しい始まりに向けてものごとを計画するにはよい日だとされています。ちょうど1年も終わりに近づく時期、先人の教えに従ってゆっくり1年を振り返ってみるのもよいかもしれません。

<ふくら雀を見る>

雀が少なくなっていますが冬場にぷっくりと羽を膨らませた雀を見かけたことはありませんか？

あれがふくら雀、寒さから身を守るために丸まっているのだとか。

あのかわいらしい姿を見るだけでも心が和み縁起がよい気がします、**「福来雀」**や**「福良雀」**という語呂合わせが、特に冬至に見ると幸運をもたらすと信じられているそうです。

また、雀自体が**「厄をついばむ」**象徴ともされていて、豊作や一家繁栄への願いも込められた冬至の風習とのことです。

2024 年の大雪は 12 月 7 日（土）です。

また、12 月 7 日から次の冬至の 12 月 21 日までの 15 日間ぐらいを指します。

大雪は、さかんに雪が降り、積もる頃とされていますが、雪のピークはもう少し先です。

本格的な冬へと移り変わる時季でもある大雪。その大雪とは、どんな時季でしょうか。

季節の言葉「冬ざれ」は草木が枯れ果てて、もの寂しい冬の様子、あるいは、そのような冬の季節のことです。寒々とした冬の風景が思い浮かぶ言葉です。

「冬ざれや 小鳥のあさる 菰畑(にらばたけ)」 与謝野蕪村

「いかにも荒れ果てて、寂しい冬だな。小鳥たちが菰畑でえさを探しているよ」といった意味です。冬ざれが好きな人は多くないかもしれませんが、一方で、冬ざれは美しいものを引き立ててくれることもあります。夜空に光り輝く月や星々、枯木立(かれこだち)、夕焼け、そして、楽しい思い出……。

大雪の時期に行われる行事として、お正月に備えて、松や榊などを用意します。

かつては、12 月 13 日に正月の松飾りに使う木を山に切り出しにいったそうです。

「松迎え」といい、松と一緒に、榊(さかき)や裏白(うらじろ)、樺(ゆずりは)なども採ってきました。

【榊】はツバキ科の常緑高木ですが、もともとは神事に用いる常緑樹の総称で、今もこの意味で使われることもあります。照り輝くような艶(つや)のある葉を持つ榊の木。輝きを 1 年中保ち続ける榊に、先人たちは神の存在を感じたのでしょう。

【裏白】はウラボシ科の常緑のシダで、羽状に分かれた葉の裏側は白っぽい色をしています。

その名のとおり、裏は白です。

【樺】はユズリハ科の常緑高木で、新しい葉が生長してから古い葉が譲るように落ちるため、この名がつけられました。代々相譲るという縁起を祝って、新年の飾り物に使われるようになりました。

「煤払い」や「松迎え」など、お正月の準備を始める時期でもあります。

【針供養】「縫物が上手になりますように」と願いながら折れた針を供養する日です。いつも固いものを刺して使い古し、この日だけは柔らかいものに、と「こんにやく」、「豆腐」に針を刺して近くの神社に納めます。

【事納め】「事」が神様の「事」なのか人の「事」かの違いにより 12 月 8 日と 2 月 8 日のいわゆる事納めの八日が事始めであるのか事納めであるのか変わってきます。

人の「事」を意味する場合、農作業の流れを汲むため 2 月 8 日が事始め、12 月 8 日は事納めとなります。

【正月事始め】

12 月 13 日に神社やお寺で行われる行事で、新年に向けて準備を始める日とされ**鬼宿日**(きしゆくにち)といい、婚礼以外のことは何をするにも縁起が良いとされています。

この日に**煤払い**(すすはらい)など新年を迎える準備も始めます。

お歳暮を贈る時季、【歳暮】は文字どおり、年の暮れ、年末、歳末のことです。

その歳暮の時期に、1 年の感謝を込めて品物を贈ることを「歳暮の礼」や「歳暮祝(せいぼいわい)」などといいました。

これが略されて、単に「歳暮」になり、丁寧な表現として「お歳暮」とも言うようになりました。

お歳暮を贈る時期は、一般的には、12 月 13 日～12 月 20 日ごろがよいとされています。

【師走】12 月のことを、師走(しわす)といいます。

その師走の、おだやかに晴れた天気のことを、「師走日和(しわすびより)」といいます。

「日和(ひより)」は、もともと、単に空模様をさす言葉でしたが、次第に、晴れたよい天気や、何かをするのにちょうどよい天候をさすようになり、「〇〇日和」という複合語もたくさん生まれました。

2024 年の小雪は 11 月 22 日（金）です。

1. 小雪

小雪は漢字通り「わずかな雪が降るころ」という意味。積もるほどではないことから、この名が付いたと言われています。

なお小雪の前は「立冬（りっとう）」、小雪のあとは「大雪（たいせつ）」です。

立冬は冬の兆しが見えてくる頃、大雪は本格的に冬が到来する頃を表します。

小雪の節気は寒さが増す時期で、自然が冬の到来を告げるサインを送ります。

街の道々を覆う黄金色の落ち葉が、季節の変わり目を教えてくれます。

この季節の散歩は、変化する自然を体感する絶好の機会です。

雪がちらつくこともあります。昼間はぽかぽかとしていることも多く、比較的過ごしやすい季節といえるでしょう。

なおこの時期、春のように温くなる日は「小春日和」と呼ばれています。

2. 新嘗祭

新嘗祭（にいなめさい）とは、天皇が新穀（お米）を宮中の神殿に備え、自らも食することで収穫への感謝を表す儀式。古くは旧暦 11 月第二卯の日に行われていましたが、1873 年新暦を採用してからは 11 月 23 日に決められました。

1948 年以降 11 月 23 日は「勤労感謝の日」と名前を変えて国民の休日になりましたが、新嘗祭は今も変わらず宮中や神社で執り行われています。



3. 酉の市

11 月 29 日は「三の酉」

開運招福や商売繁盛を願い、例年 11 月の「酉（とり）の日」に開催される祭「酉の市」。

最初の酉の日を「一の酉」、その後、12 日おきに訪れる酉の日を「二の酉」、「三の酉」と呼び、2024 年は、「一の酉」が 11 月 5 日（火）、「二の酉」が 17 日（日）、「三の酉」が 29 日（金）に行われます。

酉の市とは、江戸時代から続く、関東を中心とした各地の鷲（おおとり）神社の年中行事。

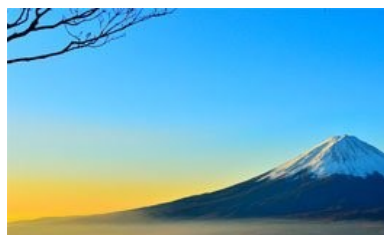
11 月の十二支の酉にあたる日に「酉の市」が立ち、縁起物がたくさんついた熊手が売られます。

新年の開運招福や商売繁盛を願う祭として親しまれています。



もうすぐに今年も終わるなあ、と思わずにはいられない時期、
「小雪の候」の富士山の様子を紹介した句

『霜月や 雲もかゝらぬ 昼の富士』 正岡子規



2024 年の立冬は、11 月 7 日（木）です。

立冬は秋分と冬至のちょうど中間で、暦の上ではこの日から冬になります。

木枯らしが吹き、冬型の気圧配置に変わってくると本格的な冬の到来です。

鮮やかだった木々の葉もだんだんと色あせ、冬枯れの様子が目立つようになります。

日が暮れるのも一段と早まります。北国からは初雪の便りも届き始めます。

上旬はまだ時おりあたたかな陽気の日もあるはずです。

そんな日を「小春日和」と言います。

「こよみの上では冬の始まり」と聞くと、少し季節を先取りした感じがしますね。

これからの行楽のベストシーズン、季節の移り変わりを感じながら楽しみましょう。

1. 紅葉狩り

紅葉を鑑賞する習慣は奈良時代から始まったといわれ、「万葉集」にも登場しています。

平安時代の頃に貴族の間で広まり、紅葉を愛でながら宴を開いていたようで、

その様子は「源氏物語」にも描かれています。

その後、江戸時代には庶民も楽しむようになり

季節の行事として定着していきました。



2. 実りの秋

秋は穀物や果物などの収穫が多く、「実りの秋」を連想する人も多いでしょう。

「食欲の秋」を思い浮かべる人も少なくありません。秋は作物への感謝と翌年の豊作を祈り、各地で秋祭りが開催されます。

その代表的なものが、伊勢神宮をはじめ各地で開催される「新嘗祭」です。

神様に新穀（その年にとれた米などの穀物）をお供えし、新穀を得たことを感謝するお祭りです。

3. 収穫に感謝し厄除けを祈る冬の火祭り火焚祭 11 月 8 日（金） 13 : 00～

火焚祭は今年一年間の収穫に感謝する行事で伏見稻荷大社のものは全国一のスケールで、立ち上る炎に圧倒されます。その起源には諸説ありますが、宮中行事である新嘗祭に由来すると、太陽の力が一年で最も弱まる冬至に合わせて行われることから、その復活を願ったことに起因するとも言われています。

本殿の祭典のあと、火焚きの儀が行われます。本殿裏手の斎場に 3 基の火床を設け、神田でとれた稲のわらを燃やし、恵みをもたらしてくれた神を山に送ります。

その際、全国から寄せられた 10 数万本の願い事が書かれた火焚串を焚き神楽舞が行われます。



「立冬」。暦の上では冬の気配が現れるころ。

俳句の世界では、「冬立つ」「冬来たる」「冬に入る」という季語も、立冬を表しています。立冬は、木枯らしが吹きはじめる季節ではありますが、地域によっては、まだ秋の盛り。正岡子規が立冬に寄せて詠んだ句。

『 菊の香や 月夜ながらに 冬に入る 』 正岡 子規

菊の香りがするなあ。よい月夜であるけれど、暦の上ではもう立冬だ。

菊の香りが漂う月のきれいな夜だけど、もう冬に入（はい）ったのだなあ・・・と季節の移り変わりの早さを詠んだ句です。

実は、この句にある「菊」と「月夜」は秋の季語で、「冬に入る」は冬の季語。

このように、異なる季語がいくつも使われている句は珍しいようです。

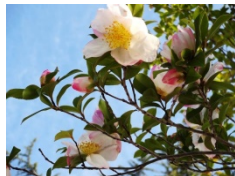
季節の境目がわかりにくくなった昨今の気候に慣れた私たちには、共感しやすい句かもしれないですね。

「立冬」の夜、きれいな月が出たならば、この歌を思い出しながら眺めてみませんか。

七十二候によると、立冬の最初の5日間は「山茶始開」。

「つばきはじめてひらく」と読まれています。山茶（つばき）とは椿ではなく、冬のはじまりに花を咲かすツバキ科の山茶花（サザンカ）。赤やピンクの花を咲かせ、その呼び名は中国語の「山茶（さんさ）」が語源です。

サザンカとツバキは、どちらも冬に花を咲かせますが、開花期には少し違いがあります。サザンカは10月頃から花を咲かせますが、対するツバキの開花期は11月中旬以降。サザンカとツバキには、花の咲き方にもそれぞれ特徴があります。サザンカの多くは完全に平開して咲くのに対して、ツバキの花は、平たく開いて咲くことはほとんどなく、カップ状になることが多いです。



サザンカの花には香りがありますが、ツバキには香りのある品種は少ないです。

山茶花（サザンカ）は、童謡の「たきび」の二番の歌詞に登場する花で、冬の季語です。
♪さざんかさざんか咲いた道♪たきびだたきびだ落ち葉焚き...

一方、椿は春に開花し、花びらが根元でつながっているため、散る際には花ごとほとりと落ちます。歌ではアンコ椿は恋の花（都はるみ）や雪椿（小林幸子）など椿を歌った歌は数多くあります。

「霜降（そうこう）」は、10月23日頃から11月7日頃までの時期を指します。

暦の上では秋の最後の節気で、寒さが厳しくなり露が凍って霜が降り始める時期です。

この時期、京都では「時代祭り」、九州北部では「くんち」等、様々なお祭りが開催されます。

1. 時代祭 10月22日に行われる平安神宮の例大祭



「時代祭」は5月の「葵祭」、7月の「祇園祭」とともに京都の三大祭りの一つです。

平安神宮の創建と平安遷都1100年を奉祝する行事として1895年(明治28)に始まりました。桓武天皇が794年(延暦13)に長岡京から平安京に都を移した10月22日に「京都の誕生日」として、毎年開催されています。

行列は明治維新時代の維新勤王隊から時をさかのぼり、次いで江戸、安土桃山、室町、吉野、鎌倉、藤原、延暦と8つの時代にまたがって、それぞれの時代の衣装をみにまとった20の列、牛や馬を含む総勢約2000名におよぶ行列が秋の都大路を練り歩きます。

列の長さは2kmにも及びます。約12,000点にも及ぶ衣装、祭具、調度品は綿密な時代考証が行われて、細部に至るまで各時代を再現しています。

その豪華絢爛な時代絵巻は目を見張るばかり。

京都に受け継がれてきた伝統工芸技術の粋を感じることができます。

行列は、京都御所を12:00に出発し、丸太町―烏丸通り―四条通り―河原町通り―三条通り―神宮道を経て14:30ごろ平安神宮へ還御します。

九州北部の秋祭りの「くんち」は収穫を感謝して奉納される祭です。

「おくんち」と称される場合もあります。

「日本三大くんち」として次の「くんち」が有名です。

10月7～9日 長崎くんち（長崎県長崎市）

10月23～24日博多おくんち（福岡県福岡市）

11月2～4日 唐津くんち（佐賀県唐津市）

2. 博多おくんち

福岡市博多の総鎮守で、博多っ子からは「お櫛田さん」の愛称で親しまれている櫛田神社。毎年7月に行われる奉納行事「博多祇園山笠」は、町中が熱狂する祭りとして有名ですが、毎年10月23日～24日に行われる秋季大祭が「博多おくんち」です。

祭りの歴史は古く、1200 年以上前から始まったとされています。

毎年 11 月 23 日に行われ、その年の新穀を神様にお供えして感謝する新嘗祭(にいなめさい)が起源となっていますが、1953 年から時期を前倒しにして、名称も現在の博多おくんちに変わりました。

期間中は様々な神事が執り行われますが、牛に曳かれた神輿を中心とした行列が約 5km にわたって町を巡行する 24 日の「御神幸」が最大の特徴にして見所です。

例年、牛車の後ろに獅子頭や稚児行列、ミス福岡が乗ったオープンカー、ブラスバンドが続き賑やかな「おくんちパレード」を繰り広げ、博多の秋の風物詩となっています。



3. 唐津くんち

唐津くんちは佐賀県唐津市で例年 11 月 2 日～4 日に開催される唐津神社の秋季例大祭です。くんちとは「供日(くにち)」が九州の方言で訛ったものとも言われ、九州北部地方では秋祭りの事を「くんち」と呼ぶ地域が多くあります。

お供えの日と書くことから、秋の実りを神様にお供えして五穀豊穡に感謝するお祭りです。最大の見どころが、江戸時代から続くお神輿の渡御と、お神輿にお供する個性豊かなヤマ(曳山)の数々。最古の曳山は、文政 2 年(1819)に氏子町の一つである刀町によって奉納された赤獅子といわれています。

それ以後、明治 9 年までの 57 年間に 15 台の曳山が製作されました。

そのうち 14 台が 150 年近く経った今も大切に受け継がれ現存しています。

祭りは 1 日目の夜 7 時半の宵曳山(よいやま)から始まります。

堤灯の灯りがともった曳山が、旧城下町を巡行しながら唐津神社に集合する光景はとても幻想的です。

2 日目は「御旅所神幸(おたびしょしんこう)」が行われ、唐津くんちの最大の見どころである「曳き込み」を目当てに、県内外から大勢の見物客が訪れます。

お神輿と曳山が目指すお旅所は西の浜にあるため、車輪が砂地に埋もれなかなか進みません。曳子たちの掛け声は最高潮に達し、豪快に曳き込む様子はまさに圧巻です。

曳山は一番曳山の刀町・赤獅子から十四番曳山の江川町・七宝丸まで、制作年代順に並んで旧城下町を回ります。

3 日目の翌日祭では、御神幸とほぼ同じ巡路で旧城下の東西約 8km を「エンヤ、エンヤ」「ヨイサ、ヨイサ」という威勢のよい掛け声とともに回ります。

秋と言えば、実りの秋。秋を代表する果物と言えば、柿ですね。

そして柿と言えば、明治の俳人・正岡子規

～柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺～

これは俳人で歌人の正岡子規が明治時代に詠んだ一句です。

子規は 1895 (明治 28) 年 10 月 26 日に奈良の旅先で、この句を詠んだといわれます。



法隆寺境内鏡池の傍にある同句の句碑



夏目漱石「鐘つけば銀杏散るなり建長寺」

若くして世を去った子規が 34 歳の生涯で遺した 20 万以上の俳句の中でも特に有名な句です。同世代の夏目漱石が詠んだ、次の句が子規の感性を刺激した可能性が指摘されています。

「柿食えば 鐘がなりけり 建長寺 (けんちょうじ)」

漱石は禅の修行のため鎌倉に滞在していたことがあり思い出の深かった建長寺での句です。

子規は 28 才のとき日清戦争に記者として従軍、結核に罹ります。

明治 28 年 5 月 14 日、帰国するため佐渡国丸で大連から日本に向けて出発。船内で血を吐き体調を崩し、神戸病院に入院後、須磨保養院に移り、退院して故郷松山へ移動。

松山中学の教員として赴任していた大学の同級生、夏目漱石の下宿に 50 日ほど居候。

漱石は 2 階、子規は 1 階に棲み、子規は松風会のメンバーに漱石を加えて句会三昧の日々を過ごしていました。

子規が松山に居た期間中に漱石は愛媛の海南新聞に上記の俳句を投稿しています。

子規は当然この俳句を知っていたと思われます。

子規は東大予備門において夏目漱石と同窓生であり漱石とはとても仲がよく子規が病に患ってからも療養生活の看病を必死にしていたといわれています。

『柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺』は療養生活の世話や奈良旅行を工面してくれた漱石に対してのお礼の句であるといわれています。

子規はその後病状がよくなったため 10 月下旬に帰京しますが、その途中で奈良に数日滞在。法隆寺を訪れ、この句を詠みました。

東大寺転害門の隣に宿をとった子規は夕食後に宿の人に御所柿を所望し、次々に食べました。

この句は、法隆寺境内の鏡池のほとりに句碑が建てられています。

柿の文化作品を作りたい子規が、東大寺の鐘と柿、法隆寺の茶屋、漱石の俳句を全て取り入れて、俳句の最高傑作を生み出したのだと考えられています。

法隆寺の句が有名になったとき子規はすでに亡くなっていました。

全国果樹研究連合会カキ部会は、この句を詠んだことにちなみ、10 月 26 日を「柿の日」として制定しています。

2024 年の寒露は 10 月 8 日です。

寒露とは、草花に降りる冷たい露のことで、この時期、山野では紅葉が始まり、秋の草花も見頃となり、朝晩は冷えてくるので、ようやく夏の疲れが取れて体力も回復する時期でもあります。

この時期の行事に熊本県の六殿神社の「流鏝馬神事」があります。

六殿神社は、熊本県で初の重要文化財となった朱塗りの楼門を有し、

流鏝馬は、秋の例大祭の奉納神事として 10 月 9 日に行われ、馬追いなども行います。



他に、「日本三大くんち」と呼ばれる行事があります。

「くんち」という言葉は聞き慣れませんが、旧暦 9 月 9 日を重陽（ちょうよう。陽の数字のうち最も大きい 9 が 2 つ重なるめでたい日）として祝う中国の風習がルーツとされ、「博多おくんち（福岡県）」、「長崎くんち」、「唐津くんち（佐賀県）」をあわせて「日本三大くんち」と呼びます。

昔、太夫（たゆう）町の遊女が長崎の氏神である諏訪神社神前に、謡曲「小舞（こまい）」を奉納したことが長崎くんちの始まりといわれ、3 日にわたる祭りは、10 月 7 日の諏訪神社境内での奉納踊りで幕を開けます。

この奉納踊りは、中国だけでなくオランダやポルトガルなど外国からの影響が色濃い長崎らしく、異国情緒溢れる踊りです。

よく知られているのが「龍踊り」で、「鯨の潮吹き」「太鼓山（コッコデショ）」などもあります。

その他、寒露の時期に行われる行事に神嘗祭（かんなめさい）があります。

伊勢の神宮で、例年 10 月 15 日～17 日に開催されます。その年に収穫した新穀を天照大御神に捧げ、御恵みに感謝するお祭りです。

10 月 12 日は芭蕉忌です。

「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」 松尾芭蕉

この句には「旅」・「病」・「夢」など読み手が共感しやすい言葉が並び、孤独を感じさせる「枯野」もあります。そして句の背景には近づく「死」があります。

「旅の途中で病床に臥していながら、夢の中ではなお枯野をかけめぐっている」